

みどり

医心伝診 修琴堂大塚家の系譜

現代漢方の確立者

伝統医学の復興に尽力 父子ともに斯界の第一人者



修琴堂四代 大塚敬節氏肖像

現在、医師の五割以上が何らかのかたちで漢方に関わっているといわれる。漢方医学は江戸時代までは医療の主流だったが、時代の趨勢と明治新政府の方針によって衰退を余儀なくされた。

今日の漢方隆盛を導いた功労者といえば、修琴堂醫院四代目、北里研究所附属東洋医学総合研究所の初代所長となった大塚敬節氏の名が筆頭にあげられる。現当主は修琴堂大塚家五代目の恭男氏。北里東医研の現所長である。

修琴堂大塚家の初代は希斎という。土佐高知の人で、山内侯の家臣。産婦人科を業とした。その先祖は北村姓で、山内一豊に従って高知に移ったと伝えられる。「修琴」とは人体を琴になぞらえ健康体を作るといことから、希斎にはなかなか子供がでなかつたので、兄の子を養子とした。二代目恭斎である。

恭斎も産婦人科を継いだ。恭斎はかの華岡青洲が開いた医塾「春林軒」に入って医学を学んだ。華岡塾の門人帳に「安政四年三月十五日土佐領石色

眠症と盗汗の持病が、民間療法で一晩にして治癒したのがきっかけだった。

医学を卒業した敬節氏は、漢方医学を学ぶ決意を固め、当時の数少ない漢方医書をむさぼり読んだ。最も感銘を受けたのが、当時刊行されたばかりの湯本求真著『皇漢医学』である。

『皇漢医学』の独習によって試みた漢方薬は、驚くほどの効果があった。手さぐりて用いてもこれほどだ。師に就いて学べばどんなに効くことか。こう思ったら矢も盾もたまたらない。

敬節氏は妻と生後まもない長男恭男氏を高知に残し、単身東京へ出て、湯本求真の門に入った。周囲の人はみな反対した。時に昭和五年、三十一歳であった。

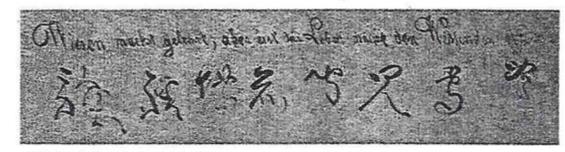
翌昭和六年、敬節氏は郷里から妻子を連れ、東京・牛込船河原町に開業した。当時漢方といえば零落のどん底だった。患者の一人も来ない毎日が続いた。しかし向学心はつる一方だった。

そのころ、敬節氏は詩友の伊福部隆彦氏を介して、権藤成卿の知遇を得た。権藤は農本主義者で、その主張するところは自然漸化の東洋思想に根ざしたものであった。敬節氏は大いに感じ、その思想を漢方に生かすべくつとめた。

敬節氏は湯本求真に就いて、中国漢代に著された『傷寒論』という古典を信奉する古方派の漢方を修めた。当時の漢方界では後世派や折衷派をもって任ずる別派もあった。これに対し、権藤は「古方派には排他癖がある。反対学を学べ」と説いた。権藤の助言は敬節氏の考えを一転させた。「ただて

大塚修琴堂の名を日本中に知らしめたのは、四代目の敬節氏である。明治三十三年の生まれ。大正十二年に熊本医学専門学校を卒業した。

敬節氏は医専で西洋医学を学ぶうちに、西洋医学に対し、疑問を抱くようになった。それは、内科の教授の治療ではいっこうに好転しなかつた不



大塚家に伝わるナウマン氏の書
"Wissen macht gelehrt, aber erst das Leden macht den Wissenden weis."
学専見聞 命増経致

さえない漢方家同士が角つき合わせていたのは、自分で自分の首を絞めるようなもの。大同団結だ。こうして敬節氏は、日本漢方界の団結と復興への道を邁進することとなる。

敬節氏は昭和五十五年八十歳の生涯を閉じるまで、そのすべてを漢方に捧げた。昭和九年、日本漢方医学会の創立。昭和十一年、借行学苑の結成。東亜医学協会の発足。昭和十八年、同愛記念病院東方治療研究所設立。戦後昭和二十五年、日本東洋医学会発足。さらに金匱会中将湯ビル診療所、日本漢方医学研究所の創設。これら戦前戦後の漢方の研究・教育・診療機関の設立に、つねに主導者として活躍。昭和漢方の第一人者としての名声を不朽のものとしたのである。大塚修琴堂は西萩を経て、昭和三十年四谷三栄町に移転。常に門前市をなすほど患者の評判を得た。

昭和四十八年には、武見太郎日本医師会長と計り、港区白金の北里研究所敷地内に、北里研究所附属東洋医学総合研究所を創設し、初代所長に就任した。同研究所は日本で最初の公認東洋医学総合研究機関で、ようやく漢方は現代医療のなかでの地位を確保した。昭和五十三年には漢方界で初の日本医師会最高優功賞の受賞者となった。



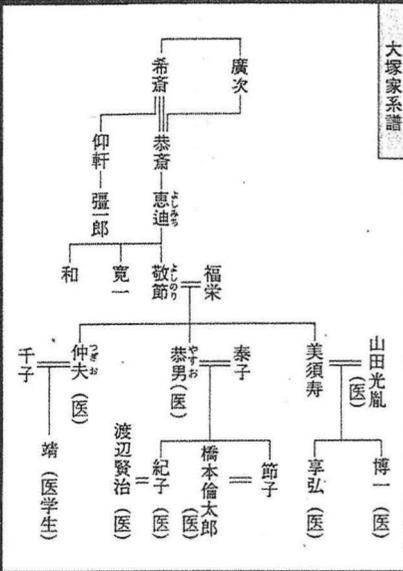
大塚恭男氏(「修琴堂」の扁額は書家川村嶺山の揮毫)

昭和三十年、東京大学医学部を卒業。東大附属病院第一内科、ついで東大薬理学教室で研究。医学博士。昭和二十七年四月、西ドイツ・オーストリアに留学。帰国後、横浜市大講師などを経て、昭和五十一年、北里研究所附属東洋医学総合研究所に入所。臨床研究部長・副所長を歴任し、昭和六十一年所長に就任。現在に至る。本年五月まで二年間にわたり日本東洋医学会会長をつとめた。

日本東洋医学会常任理事はかの要職にある。

恭男氏は血筋を継いで文学の愛好家。それも和漢洋を問わない。幼いころから和歌や漢詩に親しんだ。百人一首の選手もやった。アララギ派にはとりわけ傾倒した。今でも話題が斎藤茂吉や中村憲吉及ぶと、とどまるところを知らない。その作品はことごとく読んで暗記したというから、恐れ入る。

医学部一年生のとき「朝日歌壇」に投稿した。年が明けた昭和二十七年三月二十日の朝日新聞に、斎藤茂吉選として「燈を消して寒くなりたる午後五時の解剖室に手を洗ひをり」が載ったときの嬉



大塚家系譜

希斎 廣次
仰軒 強一郎
和 寛一
福栄 美須寿
敬節 節子
泰子 節子
美須寿 節子
山田光胤 博一(医)
仲夫(医) 靖(医学生)

* 現当主の恭男氏は昭和五年、敬節氏の長男として生まれた。東京府立第一中学校、武蔵高等学校を経て、

しきは、今も忘れないと語る。同じ年には広島布野に中村憲吉の生家を訪ねた。数年後に迎えた泰子夫人との新婚旅行でも再度布野を訪れたという熱の入れよう。

また漢文にもめづっぽう強い。若いころには古典漢文の典範『文選』を原書で通読したこともある。少しアルコールが入ると、六朝・唐宋の漢詩が無尽蔵に出る。一方、フランス文学も原書で読んだ。ドイツ語も英語も達者である。酒席の余興にはインド訛りの英語も出る。こういうわけだから、恭男氏の文章の巧さは斯界では定評がある。その随筆は人の心をとらえて離さない。

中学一年のとき、恭男氏は「学友」という雑誌に、父敬節氏の学友A先生のことを題材にし、「僕もA先生や父の志を継いで医師となり、今日では衰亡のどん底にある東洋医学の復興の為に懸命の努力を捧げたいと思っています」と将来の抱負を書いた。現在恭男氏は東洋医学の第一人者として、臨床・公務に多忙な毎日を送っている。

* 恭男氏の令姉は、漢方界の重鎮で今年日本東洋医学会の会頭をつとめた山田光胤氏の夫人である。山田氏の二人の令息はともに医師で、漢方界の若手として将来が囑望されている。また、恭男氏の令弟仲夫氏は整形外科医で、その令息も医学士。

恭男氏には泰子夫人との間に二女がある。長女の節子さんは昨年暮れ、京都府立医大卒の小児科医と結婚。次女の紀子さんは今春東京女子医大を卒業し、慶大卒の内科医と結婚した。

五代にわたった名医大塚家の伝統は、たとえ姓は変わっても、綿々と子孫に受け継がれつつある。

北里研究所附属東洋医学総合研究所
医史文献研究室室長 小曾戸洋